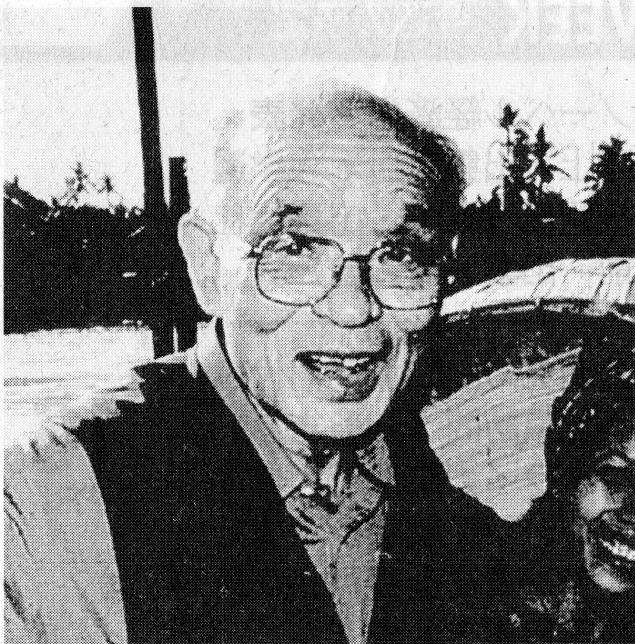


悼む

2015
10月
12日

毎日



辺境から歴史見つめ

歴史には表と裏、光と闇がある。光から闇は見えず、闇は闇の中で目を凝らすしかない。被差別民、漂流民、遊芸人、陰陽師ら歴史の闇に消えた人々や芸能、文化の地下水脈を探った「沖浦ワールド」に私は魅せられてきた。

「おーい、こっちこっち」。

1993年の春、兵庫県の被差別地区調査のあとの懇親

会。酒盛りの真ん中で沖浦さんが手招きしていた。「沖浦さんの名の通り、3代前まで船乗り。祖先は海賊の末裔や」。初対面のときのにこやかな笑顔が鮮やかに思い浮かぶ。

27（昭和2）年元日の生ま

れ。昭和と共に生き、全学連結成で青春の血をたぎらせ、ゴリラのような押しの強い幹部という「ゴリカン」のあだ名がついた。てっきりゴチゴチのマルクス主義者と思いこんでいたら、おしゃべりで気さくな海賊の親分のようだった。

自らのルーツをたどる瀬戸内の「海の民」や山の漂流民「サンカ」の聞き取り調査、南の島々への旅に何度も付き合った。思いついたらすぐに現地に足を運び、日本の古層を探っていく。辺境から歴史

おき うら かず てる
沖浦 和光さん 民俗学者・桃山学院大名誉教授

腎不全のため 7月8日死去・88歳

を見つめる旺盛な好奇心、視点の低さに圧倒された。

村の古老たちから話を引き

出すときの話術も巧みだっ

た。笑みを絶やさず語りかけ、

だれもが和やかに心を開いた。30回以上訪れたインドネ

シアの海に今夏、遺骨がまか

れると、現地の日本語ガイド

のサリーさんは海に飛び込み

号泣した。長男に「オキウラ」

と名付けた同じガイドのマル

セルさんも深く悲しんだ。

その温かい人柄を慕うファン

が集まり、しおぶ会が11月

3日に大阪で開かれる。来春

には著作集（全6巻、現代書

館）も刊行される。「もっと

闇を探りたい」と語っていた

ときの、少年のような目の輝きが忘れない。（元毎日新聞論説委員・池田知隆）